



草庵集蒙求歌解二

春





草庵和歌集蒙求諺解卷第三

梅月堂僧宣阿集編前

梅仙堂平景新訂正

春行下

小倉大納言正二位權大納言實教卿歿。藤原系圖

曰。小倉元祖。公雄卿男。号富小路。貞和五年薨。八

十六歲。法名。覺阿。小野社。續日本紀卷三十二

曰。寶龜三年四月己卯。震西大寺。西塔。卜之。採近

江。國滋賀郡小野。社本。楠塔。為崇元當郡。戶二

烟。云云。神名帳云。近江國滋賀郡小野社。二座。神名

續日本後紀。三代實錄等。授位の事あり

此神歿







紅紫やこころ秋のまねたり 秋のまねたり 花を待つづからんか  
日あはば暮かたむさし。若し。と暮らしたるあはれ也

花弁中よ

まじりたる待みし花をさうふもいまだたのきを花さうりや  
毎年まいねんはしむる。日ひを思おもひ合あはせ。かんとくこころいびくや今いまの  
さうりたりきた。けりてやんんと也

民部の家百首よ 雨の中待花

さうりたるよとれ本のめとまぬふいりつをさうりたる様うか  
本のめ春ぬとい。本のめれり人ゆり花張とまゆ。まはらといひ  
さうり也。我われやこころのめ春ぬふらとまはらぬ。まはらぬとま  
さうりける 春上 判はりさうりたるもまはらぬ。まはらぬとまはらぬ  
花さうりたるもまはらぬ。まはらぬとまはらぬ。まはらぬとまはらぬ  
ほれたる。候はむさうはむもあはれ。まはらぬとまはらぬ。まはらぬとまはらぬ

ほれたる。と張るるも

清子た丈細言家二首よ 案居待花

ふ里のさうり人かすていりりよ。花を日教とまはらぬ。まはらぬ  
人もさうり也。さうりたるもまはらぬ。まはらぬとまはらぬ。まはらぬ  
まはらぬ。日と長く思ひつら也。又花の待りゆ。入日とまはらぬ  
さうりたるもまはらぬ。まはらぬとまはらぬ。まはらぬとまはらぬ  
民部の家十首よ 初花

一本まじり候さうりよりあはれ。まはらぬとまはらぬ。まはらぬとまはらぬ  
人の心乃花さうりける 古年 古年さうりたるもまはらぬ。まはらぬとまはらぬ  
命は一本候とさうりたり。世にれ人。花を賞あやめたり。まはらぬとまはらぬ  
候り也

兵庫の長秀よりと待りよ 初花

さうりたるもまはらぬ。まはらぬとまはらぬ。まはらぬとまはらぬ



















おのゝよりくづくあふ方より風いふらん五十一 何もの影さ  
ふはささぐらだ中よまにもうせはよせらん後二 是は  
阿知のかん也。公のちたかんといひ別けりまのふづりま  
かんらんをばおけれたの候入三十一 我々のたると  
ふらん人の教らん候とまひくふと善ト げかサガ

友系宗基よませゆり奇よ 震中花

此藤原氏不審也。此集哀傷部。げらるゝかどふ  
くはり。友系宗基。三善於尚。め宗身中よりそ後  
けりて新千載集よ。名孤疎しけらるゝ張んそと  
新千載集を考りふは三人の奇とそと。新千載  
集。別。常陸國へゆりけり人よけりけり。紀宗基  
の長。礼のちをくかどとけりりふ。其後のみられん  
きりてゆりいそと中れとある奇ふだれ。友系に傳へ

紀宗基歌部類之。紀宗基四位。淨圖子所願。新  
千載集一首云々

雲あがしやがふいつくさみよ。ねたなひれ梅あふらすし  
たのむとくやうたはそとそを。面あさふ。中んまをひけり  
事也。それさうつとそよ。又中夜てえん 明かたね。ゆりつと  
り。たしめさむむと也。古人。存よ。古詩への梅の人丸  
うめははせとらんんけりと者。せとらんん事とそいて。せか  
奇めやさふ。ふのけりたのむと。らん事とそいて。せか  
とゆりしるをほくまきとらんん。奇妙なる極向也。つと  
けり。後詞に集雅類。別。も。中んも。けりゆりつとらん  
ふいも。らんぬ。梅を。上り世奇よりゆり

入道ちん 友系宗基よま

梅ももいふよ。咲くよりけりいそとれあけり







乃ちわくしり。たの足ゆう飯。花はゆりとしらる。曙の伴。後  
よんる中しなら。守色たり。霞のわく。 例 翠をてて花とら  
わらしりせふかす。のせくふんく。一向き 後多松抄改之段  
大前千春上

建武三年内裏千春 皇地儀

建武三年改<sup>改</sup>延えしり。も。ゆらぬ前よか。と後し

き。とのまき。をりしりたるし  
様はくいつぐいあきどま。くはるもむかふより。せれふ  
花の名<sup>な</sup>あいつぐも。せかふれども。吉野ふい。か。くはる  
正るまは。毎<sup>まい</sup>年の春あて入也。吉野の花より。くはる  
ふり。松子<sup>まつこ</sup>わくふく。ゆり。花をてて入て住居<sup>すまがら</sup>と  
す。あされい。花も各<sup>くづら</sup>列面白あ也。か松るる。て春乃  
地儀よけつる。つはくいあれと。みらのくいつくはあれと  
とらりまの浦く。あははるて。と。 右大  
左西

山路花

ふまつふといつて。き。まぬよ。たれあうく。神をゆり  
ふまはるふい。つて。い。ゆ。に。て。ゆ。く。も。せ。か。え。ぬ。よ。袖  
く。は。る。た。の。香。は。次<sup>し</sup>弟<sup>てい</sup>め。く。ゆ。り。と。と。人。い。と。て。は  
ふ。深<sup>う</sup>く。入。し。ゆ。わ。ま。こ。れ。花。の。あ。り。神。よ。う。つ。つ。て。ほ。く。成  
く。わ。也。と。し。り。花。乃。香。成。う。く。貴。殿。し。り。の。也

青蓮院入る二雨親王家三首小 花盛

出家<sup>しゅけ</sup>の後。親王<sup>しんおう</sup>早<sup>さう</sup>を。受<sup>うけ</sup>給<sup>たま</sup>ふを。入る親王<sup>しんおう</sup>と。云。親王<sup>しんおう</sup>  
号<sup>なう</sup>を受<sup>うけ</sup>くは。得<sup>え</sup>た<sup>た</sup>り。と。は。親王<sup>しんおう</sup>と。は。親王<sup>しんおう</sup>の  
方<sup>かた</sup>か。る。よ。事<sup>こと</sup>也。け。お。い。る。親王<sup>しんおう</sup>也

うららふもはらふも。あきど。く。く。と。ま。て。様。の。け。り。ゆ。れ  
一株<sup>いちりゅう</sup>乃<sup>の</sup>花<sup>はな</sup>も。は。今<sup>いま</sup>白<sup>しろ</sup>う。を。は。花<sup>はな</sup>の。盛<sup>さか</sup>ふ。成<sup>な</sup>ふ。れ。咲<sup>さ</sup>れ  
残<sup>のこ</sup>ら。ら。り。も。け。り。ゆ。と。ま。り。に。あ。れ。も。千<sup>ち</sup>万<sup>まん</sup>株<sup>しゆ</sup>の。花<sup>はな</sup>と







































易繫辭言不盡意とつうけられた言はと不  
被盡也

折花

家ほどふねのひらけく梅花久ふ心路よふかせる吹  
本奇事あり同じ。も毎は折てくる所ぬ。甚風吹て教  
しハ張多き也。無常迅速とつうけ

民部の家一日百首よ 折花

折てこそ我名しためはくは花はきあはしははくせいでいじ  
唯無用よ折棄をば。もしも折てくさぬ人も信なくお  
そくくがあよらつべしとて見落るに。風乃吹らるはが  
はくまきま。おとつ花を。わしに任さんよりいとせめて  
あつうつたをう也。無情よ折てはあぬ也。風よの  
まうせくいと梅花わけて社よあまもつらん

おあしんを

お折てし人をうめそさるもむきうらうとぞ盛をよもり  
翁さび人ふさぐめそ持衣々うらうとぞききうも信なる  
お折る盛は今日折也。おとは教へさ花るれいぞら  
らさんよりいと。お折やうん人もさぐひを也

花の挿頭

梅花かくあやせいさけとぞもかぞてむぬきさむね家か  
学れぬよわよて入梅花折てかざん老かくら中  
かざせどもむもかくれぬこの春ぞ花乃面いふ花は  
なる 折花 折花も古んれ奇とさるもつう也。け奇乃花は  
花とのかぞてむ乃かくぬやぶのあはさけとぞも。花  
ゆへう老とりとつうゆた。折てかざん也。花よ挽を深  
きまわらへ



兵庫以長秀家して花弁より侍ふ

いふもぬかひ花れ雪の交きてむれうづのさきとあかきと  
あや日影のうら雪の白髪也 春れ日る光にあら  
我るまきでのうられ雪とあざとまじりま 文屋長秀 古春上 さあ  
ぬえんげまは一年くらゐあゆむのうら雪れま  
うらな花をかざせば花の白さゆもるぬかひらの  
雪のまきぬえんあそとれ中しくむいづくれぬ也いづを  
はづやくちぬく也 咲花をからの雪にまじりま  
千世のかごはあまあつ 公任 十次

花柳記

こゝ語いさあうら花れ雪をかたむかぬをうづてせやく  
さかたがうらと花うづ也。りさたも日の中うら花うづ也。  
ふかひりえと日づ花の陰るに。のぞすまじりま

まじりも花あまかゆくおのづてり也。かご。松原屋  
しんか

近侍茶室白飯して 考花述懐

と年をへて花をそめていふことむれまふとくうづりま  
ブンゴフ 文集も。老去 オヒサリテ 歡情 クニシ 少とありて。老くの物づい  
みうりま。るれも。花は海のかびり。は。今も七年く  
花うづにむかひりま也

茶室白飯して

歌に

こゝろをむらふそしんつうよとあじ我身れをのんそ  
いづせしとあじはみれぬもかくあまのわらむたみ  
んが 後人 古雅下 このいふ花うづり也。何れも。其ま  
をうけていふ詞也。花も。いづとていづ。たまは。何  
て也。いづよの。い。柳也。茶室也。むの。身ま。い。







ける後字多院 風風と抄さまりけりる者なり代よ子年乃輕い  
後古春下 玉充論衡云。太半世。五日一風。  
 十日一雨云。大經云。天下和順。日月清明。風雨以時。  
 介讓位乃比るれはより死せぬやそいつり。凡の抄さ  
 まりるもの時命ち終ひたれどもさくらんていつて。伊勢と結  
 けりし也。天下乃風俗のよくて。物ぞんねたさまりる  
 を。風雨乃抄さまりて。せれ志づらふ多くして之也  
 右京指たまえ古物はふたれたれ盛しんく  
 歌よとけりし 雨中巻

部類云。惟宗。光吉。四位。後千載。後拾遺。風  
 雅集。作者

其ぬふちをゆたに乃下あひ雪よりねつる志づらふをみる  
 花を雪とくんと。志づらふ花を雪乃消時分れ侍り

たんとてより。春ぬふすこくをれらる花乃下より  
 花乃あひ雪の消分れたる也。志づらふの盛る中りなる  
 かし也

關伽井宮して 古漢花を

立からぬ花乃さうりやたふもふうりねし人よまきん  
 結漢るれども。花あれば人乃いさして。立并ぶねまきん  
 人よまきん也。虎乃威とかり狐。驥の尾よほく蠅の  
 多くとくし。古漢の古風。古めりねしを終りし  
 花の。花の。古言歌をさうりて。新よとけりし  
 月子あはれ

花山院大納言と師賢卿。秋内大臣師信公男。  
 正二位権大納言。元弘元年薨。謚文貞公。法名  
 素貞











三三三三三也。ちりりり。山路かきふ。道ちりり。草  
 木の枝と折りけ。引ちりりてを、也。禁。韻會云。夏書。隨  
 山禁本讀若刊。徐曰。本識謂隨所行林中研其枝  
 為道。記識也。双蓋其研本也。倭折狀。指事也。例。み  
 よりの枝まて花よさそりれぬ。帰らん。乃のちりり。なぞ  
花を折て下地 花を折て下地  
約は撰者下 約は撰者下  
西行新 西行新  
右春上 右春上  
 花を尋ん 花を尋ん  
右春上 右春上  
 花よまむいぬるか 花よまむいぬるか  
実房 実房  
千冬 千冬  
 雪ぞ山路のちりり也。るる  
右冬 右冬  
約家後 約家後  
 友大細言家月次三首よ 落花  
 さくさく花今やらあんとさう勢れ空ふし。ささくみ孫れさるる  
 風力雪を吹まきい。定めて。梅花のらるる。あんとささくは  
 教なんあてても。二結句一卒に。ささくをあてても。公の用い。

吹まきい。吹蔭也。捲くもあり。秋風の袖は吹まきい。炭乃雪  
 を吹まきい。けりて。雪と吹也。右春上 山風は梅吹まきい。れ  
 ちん花のほぎいよ。あんとささくは。 遍照 落花  
右春 落花  
 風のらるる。ささくもまきい。れぬ。いりり。ささく。ささく。梅か  
 春向の梅系い。いも。ささく。ねよ。小ねが。あよ。わい。雪ぞ  
右春 右春  
 つる。花のらるる。ささくも。あんと。ゆり。は。ま。風のらるる  
 とささくも也  
 民部師家よ。花をささく。て。新よ。まきいよ  
 行路落花  
 らるる。ささく。の。雪。れ。さ。さ。く。の。花。い。で。さ。さ。く。の。道  
 引かば。ね。さ。さ。く。の。方。も。あ。い。だ。く。の。山。梅。か  
右春上 右春上  
 岩けり。教つ。い。花。を。ぬ。ま。さ。さ。く。の。岩。さ。さ。く。の。道。











花を教て一はうりさ足せんも程いあるゆきも也。思て  
 けしむ也。花乃盛 例 けしむれいよるの嵐はれそく程く  
 花こそ花の盛也也 実体合 兼春 教花を又吹さよま風  
 しく花を盛ていん程もは 兼春下 撰者下 世奇何れ花乃落  
 花のけりたる也。花ふらりそけきり花を視のそたに  
 接 四つ 花のそたつりもる 例 花はも花をけりとうけり  
 花ま 左上天全 兼春下 花かとも見よ 兼春下 春風 兼春下 堪賞 兼春下  
 還堪恨 兼春下 見開花 兼春下 又落花 兼春下 三件一

源之政のあはく 落花

桜むきをのさうりと程ち花よりけりぬとく入屋人よつぎはし  
 花を教 一 花を程なくち花れぬぐれいさ花れぬと  
 きふ。花もけりあるとはき中へくも也。兼く盛んた。見  
 よ花んといひ人乃。兼く盛んて。落花は盛れい。か  
 花

けりやうりさ事とほげ、落花の盛かろぬらう  
 とも見せくや也

郭公の下の侍中細言の明に  
 惜花

心きた花もけりあはくはけりたるはしとくみどらうか  
 花を盛く思入てみるゆ。花を有ぬる花。花りて  
 けり花けしむ花の惜むも何ともさすちか  
 却て惜あくさの也。さあれは一向。あはれ  
 みあして。けりさも花かまど也。痛惜のあまうにや  
 也。惜。さすくさ花の也

夕落花

うけりささだふいて花さそ風のつらさふらう











朽くこそわれも 夢運まぐにのいかりなり也

宮内返一

とくうお清きぬ花の雪るれを 花といつらぬをれさうりと  
<sup>拾春</sup> 割中ふ清きぬ雪と見えけりい 夢<sup>み</sup>は<sup>ま</sup>き候様也まきり  
<sup>後人不知</sup> といひの山路くらしくはくはくは花まきぬをれさうり  
<sup>同春</sup> とそとんく 花の雪るれいふももまきぬをれさうり  
<sup>後人不知</sup> といひ候といふは花の雪るれをれさうりといふこと  
 一一度といふまて見よと也

清子た大細言家旬十首 落花

はるいゆく風の春<sup>たけ</sup>りともよそあそ本<sup>たけ</sup>なりんものしらう様か  
 花<sup>花</sup>さそふ風乃やういなきわらふは我よをへよめて恨<sup>そせ</sup>  
 むを<sup>そせ</sup>は<sup>そせ</sup>ふ風の春<sup>たけ</sup>りといふまて見よと也  
 うらうらうらふ本<sup>たけ</sup>なりん風の春<sup>たけ</sup>りといふまて見よと也

いりの雨の花の春<sup>たけ</sup>風のをよりたなぐてを<sup>そせ</sup>学<sup>そせ</sup>ばよと  
 ふ<sup>たけ</sup>よ<sup>たけ</sup>い<sup>たけ</sup>乃<sup>たけ</sup>詞<sup>たけ</sup>針<sup>たけ</sup>也<sup>たけ</sup>風乃<sup>たけ</sup>多<sup>たけ</sup>より<sup>たけ</sup>み<sup>たけ</sup>も<sup>たけ</sup>よ<sup>たけ</sup>と<sup>たけ</sup>人<sup>たけ</sup>は<sup>たけ</sup>は<sup>たけ</sup>そ<sup>たけ</sup>  
 也<sup>たけ</sup>花<sup>たけ</sup>散<sup>たけ</sup>在<sup>たけ</sup>根<sup>たけ</sup>鳥<sup>たけ</sup>飯<sup>たけ</sup>舊<sup>たけ</sup>巢<sup>たけ</sup>也<sup>たけ</sup>花<sup>たけ</sup>悔<sup>たけ</sup>帰<sup>たけ</sup>根<sup>たけ</sup>也<sup>たけ</sup>益<sup>たけ</sup>悔<sup>たけ</sup>

滋藤 詞詠

等持院緒た大長家一と奇よまわらぬ 花は風

ささい花くわくはうや様をらふそつとささい花は風  
 花の別<sup>別</sup> 花<sup>花</sup>さ<sup>花</sup>れ<sup>花</sup>て<sup>花</sup>人<sup>花</sup>ら<sup>花</sup>う<sup>花</sup>ぬ<sup>花</sup>ら<sup>花</sup>と<sup>花</sup>吉<sup>花</sup>舟<sup>花</sup>と<sup>花</sup>花<sup>花</sup>の<sup>花</sup>別<sup>花</sup>と<sup>花</sup>お<sup>花</sup>り<sup>花</sup>  
 の<sup>花</sup>く<sup>花</sup>は<sup>花</sup> 花<sup>花</sup>く<sup>花</sup>は<sup>花</sup>そ<sup>花</sup>花<sup>花</sup>も<sup>花</sup>つ<sup>花</sup>く<sup>花</sup>別<sup>花</sup>は<sup>花</sup>ま<sup>花</sup>ば<sup>花</sup>ら<sup>花</sup>別<sup>花</sup>を<sup>花</sup>  
 也<sup>花</sup>く<sup>花</sup>を<sup>花</sup>な<sup>花</sup>れ<sup>花</sup> 花<sup>花</sup>を<sup>花</sup>お<sup>花</sup>り<sup>花</sup>と<sup>花</sup>さ<sup>花</sup>ら<sup>花</sup>う<sup>花</sup>。花<sup>花</sup>の<sup>花</sup>風<sup>花</sup>の<sup>花</sup>  
 花<sup>花</sup>と<sup>花</sup>ら<sup>花</sup>い<sup>花</sup>て<sup>花</sup>ゆ<sup>花</sup>け<sup>花</sup>の<sup>花</sup>。花<sup>花</sup>く<sup>花</sup>は<sup>花</sup>も<sup>花</sup>ま<sup>花</sup>ら<sup>花</sup>ま<sup>花</sup>。花<sup>花</sup>の<sup>花</sup>身<sup>花</sup>  
 を<sup>花</sup>ま<sup>花</sup>ら<sup>花</sup>う<sup>花</sup>也<sup>花</sup>

清実寺花百首よ 花鏡

花とくやさうりさうりやれあのかくはけの春さうり











後小如  
右春

らん  
右春

久方のいづのどけさまはりふちづかなく花の教  
 らん 友別 くらをさるる合をてせしむ。春は月ものさる  
 ぬるれい。花をさゆりりと見らるるさしむ。思れぬ  
 の吹てぬもさうらふま。風ぬさみかたして花をむじ也  
 目ふさへてさむら わさび 葉ふいし花らふぬとゆらふらさ  
 けぞぞららる花をばむじ。ま葉のまげらま。いづく  
 花乃教わらふと見ゆらぬわさ也。雨前 ハナ 初見 ハナ 花間葉。  
 雨後兼無葉底花 一作詩

大宰。権。後實家よ花の奇よみ侍よ

俊實。小川坊城祖。權中細言俊實。類部類云。權

中細言友原俊實。前中細言定資男。風雅集

孝作者

のさふさし見ぬま葉に花らふ今とたしくらふささる

ま葉のまげらま。花の疎くは教らりとさるら。ま葉の  
 痛より今もわらむ。花のららぬとて。さていま葉がくれは  
 は花に疎くかきさる也。緑葉 スミヤク 柘 ツツ 疎 ツツ 紅 東坡

東ふよとるん倚は氏部錦花のさうらよたつ縁ま  
 くらし後Pとさゆ

此奇新千載集雜よ入詞書に氏部錦花の友三月  
 は。東ふ乃唐室よ尋まうて。花ん侍て扱とあり。  
 二のらいつくと有。色一の奇も入

ふらよの精いゆふ成わらんまこれむいさゆりせそあ  
 都の花さ。ま風ふさて。教ぬまばまうて。山里の花い  
 うみ成ゆみわらん。定 さた めくららぬこそわら。今一ま  
 んどして疎りみわらと也

新千載よいとPはらりてはらるる色い



有。於此のまゝ也

山里のとりまき一庵と跡してらじくむめま風そ吹  
ねりたえんま風そ吹く教あるとまきたまうて山里は  
一度とりてほつた。後をきしてまうねりねり。花を結  
うねてらりまきま風そ吹くつらう也とかうかこりねり  
後をきしてとりねりゆらむねりまき也。又花の字さか  
るくまきまきととりねりと計もねり

後撰よまうりて花を待よ

ほつたりとまきも中ねりまきま風そ吹くま風そ吹く  
嵐といつらび。嵐がりまきま風そ吹く。外のまきもまきま風そ吹く  
らうまきまきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く

清子大夫細言家向十首よ 残花

まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く

らうまきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
何方も花の教をまきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く

重讀院入道二品親王家 三首よ 山残花

まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く  
まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く。まきま風そ吹く



















人丸拾枚上 池乃水にさうて我よりたはたけりて  
まけとに今いさも足るはれ也四白いざの何の  
いざ見よけん故々の雪とのこせ花いらるる  
風い涼くちりぬ新か人ていさたゆらん秋乃  
人丸新 拾枚上

基任り家おく新合しゆり小 あり込後  
部類云五位た衛門尉藤原基任存藤原衛門  
基永は名観意男新後撰玉葉後千載風雅  
新千載作者

たこれうや江の夏れ候より彼乃花さ人まよいてはく  
草辛 草も本と色つらけもまらぬの彼乃花よ秋あり  
々り藤原 吉秋下 花よりも盛なるはれは川信の花をせま  
くくらくちりぬ新か人ていさたゆらん秋乃

水のまらぬ風や成らん信り花の白き火よ  
花れ候はれその下より信り雲の色れうりて  
おもはれぬとぬらぬをたいつらふ又夏る人とい  
つは花の色乃ほかろを信の花乃まらぬいつらふ  
あり不聞候よりれては其かヌまると

池乃水

池乃水指れ夏のうけきてけいさるを像なみ乃いゆり那  
みさの氷乃際也ふかきつしむも同じ又足際と云  
て物をとく一まはかりをゆくぬをみさのなるると云  
んもわりんまはまらるとしむも同じ此奇のふら者乃  
者の候より秋の移りてみさの信よりはまらぬ成り  
やちり

池上

新千載











のいとしきまゝの体。感懐少くた奇也。沈吟しんごんし

應長比よりゆく百首よ 山家暮春也

此亦新拾遺春下に入

移りゆく月日しきくぬ山里の花とくぎりにはどくしめり  
つらさを春もも。秋ももきくぬ山中に。花乃散を思ふ。  
まろくををさる也。前の款冬のつれ北史未引合こくわ

言まふ

おれもてし今日孤居の暮るよ空もくくるんれ神やわろん  
惜なげめも去れかきりの今日れ日乃夕くれふさかろん  
くろれ 伊の 震乃神。里梅も。暮と悟て我神をぬ  
らふは。そもくみ砂をわろて神をわろとくんと。るよ  
くすの志あり孤より。晚春。方巨山。客又不足春

暮しよ一簾新雨杏華寒れ 磯珠詩格 引合吟とるハ

暮春

あいつふ花れも色をさふまはりやろかほもくろくまうか  
花乃朝ハ。暮し朝く也。花は月よ。わい。強也。つらく  
ろれき也。福める花の冬をけろくまもろくちばりやと  
ろかゆも成まよろくれ 伊の古 暮の強くてあつばりまは  
きろりた花をさふまはり。春もくろくろくろれ。花  
の志といふ也。むのさうあいらん。暮さくろれてつら  
くろれ。さうり花也

茶花大納言家月次三首 二月盡

しるねくかきろ家月領の夕時白紗かきもさるたまのけれ  
今日の人しきまもさる何さふもろん。暮やろれた花のほ  
くろれ。三月晦日の夕は乃ろくす。暮ハ紗。つら







